

急いで帰宅すると、案の定帝人がすでにやってきていた。玄関には彼の靴があり、人の気配も確かにする。けれど、珍しく台所にはいなかった。

入室したとたん、カレーの香りがしたから、すでに夕飯準備は完了したらしい。部屋数は一つしかないもので、すぐに帝人の姿を見つけた。壁により掛かる形で、どうやら眠っている様子だ。疲れているのだろうか。

眠る彼へと歩み寄る。目覚める気配はなかった。すうすう、と穏やかな寝息が聞こえる。眠る彼は、いつも以上に幼く、あどけなく見えた。

(まっげ、結構長えな)

そんなことを思う。自然、口元が笑みの形に曲がった。起こすのも可哀想な気がして、そのまま寝かしておこう、と思う。まだ夕方だし、夕飯にも早い。しばらくは寝かせて、彼が起きたら夕飯にすればいい。もしも、彼が目覚めるのが遅いならば泊まっていけというだけだ。

どうせ寝るのなら、そのままの体勢よりも布団で眠った方がいいだろう。そう判断し、クローゼットを開ける。客用布団をひいてから再び彼の元へと歩み寄った。

抱き上げて、その軽さに驚く。高校生男子とはこんなに軽い生き物だろうか。

そう本気で驚嘆し考えていると、うつすらと帝人が臉を持ち上げた。

「どうやら、抱き起こした拍子に目覚めてしまったらしい。眠いなら寝とけ、と告げる前に、帝人がふにやりと笑った。」

「静雄、さん」

邪気のない、その笑顔。あどけなく眩しく、この上なく、静雄を魅了する。

けれど、なぜだろう。その瞬間、新羅の言葉を思い出す。

——— 思いを秘めたとして、帝人君に恋人ができたときに祝福する覚悟であるのかい？

その日はいつか必ず、来るのだろう。だって彼は可愛い。こんなにも。それを遮るだけの権力を静雄は持たない。

静雄が魅了されたように、ほかの人間をも簡単に魅了するだろう。そうして、こんな風に笑顔を向けるのだろう。

静雄以外の、誰かに。

(嫌だ)

先ほども思ったように、——— 否、こうして自分の腕の中に納めてしまえば、その思いはいっそう強くなる。

彼をほかの『誰か』になんて渡したくない。だって自分は彼が好きだ。こんなにも、どうしようもなく。どうにもならないほど。

心を占めるのは、恋着、執着、独占欲。それから。

(俺は)

諦めるべきだ。わかっていて。けれど好きだ。どうしても。

(こいつが、欲しい)